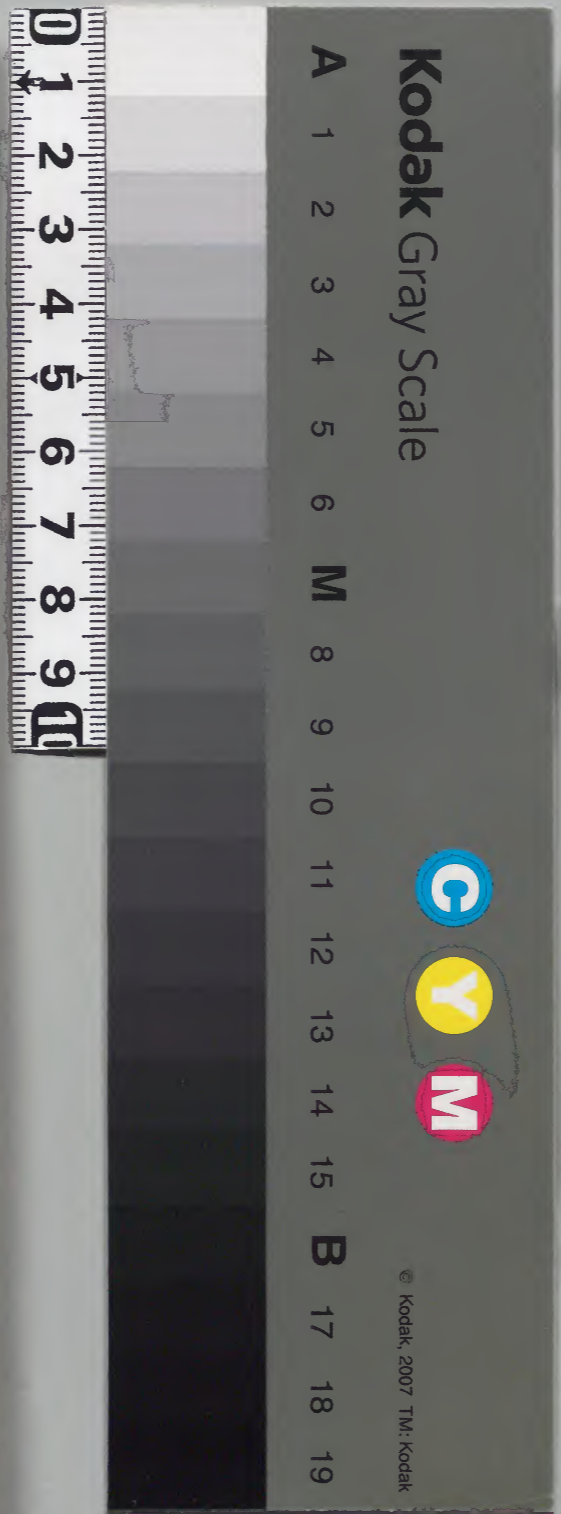


桂園竹譜

庫	文	閣	内
九	一		和
函	二		書
二	五	五	類
架	冊	號	

○の又瓦片 漢竹園竹工等類 一程夫介  
 ○面漆片 仙平介 ○鳳皇介 漢宮瓦片  
 ○杉杉介 ○其少介 又工物介 又石 漢四多介  
 ○程出明介 ○孝平介 ○子高介 漢竹園竹  
 ○尺八介 ○玉珠介 工本物介  
 ○沈竹介

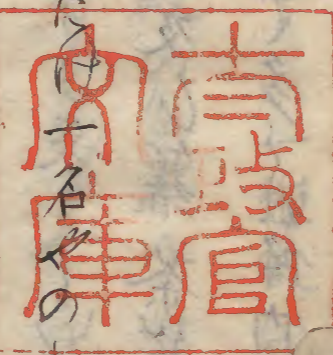
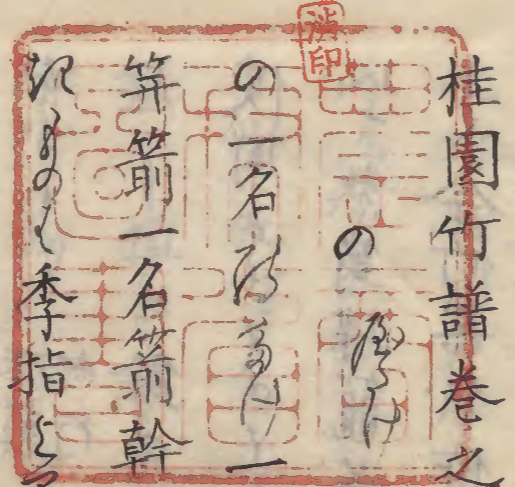
内閣文庫	番號	和 11115
	冊數	5 ( 2 )
	函號	.197 61



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



桂園竹譜卷之二



陸産

節女竹より毛平ふくも頗る蘆節に似たり毎節  
 相去る事凡八九寸或は一尺餘枝と始より獨枝より双枝  
 けりありしもの梢に至れば双枝或は三枝ありしもの  
 女竹の始より三五枝に叢生するものも其の性同くは  
 葉も長さ一尺餘廣さ一寸許少く一葉一四葉五葉或は七八  
 葉のものありしもの葉先對生ししもの餘も常竹の



あつて互生あり此竹新年は女の竹と同じく籜落  
るゝ年を経るゝ多し、あつて凡古より皇朝に  
て失作す竹と此竹と延喜の比山城大  
和より貢せ也式延喜既天武天皇の御時箭竹二千連は  
大宰府に送下せし、毛畿内の産なり、一今も年  
々大和の芳野より難波の大城へ此竹二千二百幹を貢  
す、採藥紀行ま備中の矢島及び丹波等も此竹は  
産す、一の餘の諸國も極めて多し、今江都に皆人  
使用す、一の上總より来りし、一延喜の比此竹を  
以て熬筭煤籠薰籠及び籬茶籠等を作す、一のり  
も今竹器を作す、一多く篠竹或淡苦の二竹は用ひて

此竹は用ひる事、一種天台竹一名影向竹といふ、一  
河今東叡山瑠璃殿の左右より、一の枝葉全く矢竹  
に似て矢竹より細小なり、一此種より尋常の矢竹を  
移し植す、一の竹臺の瘠地あり、一、  
細小なり、一、一江戸砂子、一影向竹と上  
野中堂乃前より、一葉の先丸く跡先あり、一常の  
竹より異なり、一、一、一別種あり、一、  
ら、一同書、一此竹と天竺祇園精舎の竹は、一天  
台山へ移す、一、一傳教大師の持来して山城の比叡山中堂  
に前より植す、一、一再ひ東叡山へ移せし、一、一也、一、  
て近北京師の人より、一比叡山の竹葉あり、一、一僅に一葉を送ら



親見々々々々の状尋常以矢竹の葉子似て少く  
厚きやうなものをいふは江戸砂子といふも葉の  
先丸なりといふは此を異あり一説は傳教大師乃携来す  
ト竹比叡山の竹林院よりいふは其の葉は少く  
日本書紀紀天武云十一年十一月癸卯朔甲辰筑紫大宰  
請儲用物絶一百疋云云箭竹二千連送下於筑紫  
延喜式織部云允雜機用度新篋竹河竹名百株毎年山  
城國進又篋六百株大和國進  
又造酒云新給新云云篋竹卅株作匣口及節柄料  
又同上云鎮魂祭新云云篋竹六株  
又主膳云主膳監年料云云篋竹八十株

又寮内云篋竹百五十株

又司車人云允應供大嘗會竹器云云熬筭七十二口燂籠

七十二口新篋別六口乾索餅籠二十四口三口別十籬六口

五口別十預前造備送宮内省

又同上云年新竹器云云薰籠大一口高二尺二寸新篋

竹五十株中一口寸高二尺八寸新篋竹卅株漉紙筭十枚

長各二尺四寸新篋竹各廿株茶籠廿枚方二尺新篋竹各

六株方二尺新篋竹各

和名類聚鈔竹類引唐韻云篋音昆和箭竹名也

大和本草云矢篋竹八節ヒキク直シ肉厚ク葉大ナリ篠竹類ナリ

本草一家言云箭竹可以為箭幹丹波洲多出之充筆管用



本草啓蒙云箭竹之形狀ノクニ似テ細ク葉箠葉ノ如シ

尚書禹云惟箇籥孔傳云箇籥是西種竹也鄭

竹譜云箇籥載籍貢名荆鄙

又云箇籥二竹紫此說原亦皆中矢皆出雲夢之澤禹貢

篇出荆書云底貢厥名言其有義名故貢之也大較故是

會稽箭類耳皮特黑澀以此為異呂氏春秋云駱越之箇

然則南越亦產不但荆也

山居賦云二箭殊葉筴箭細葉云云

爾雅翼云箇籥亦堪為矢箭大者為箠

廣西通志云箭幹竹節密肉厚案小竹節密者為會稽

今所矢竹







本草經云前竹形狀如子細...

尚書云惟慎露括... 注云前竹...

去前竹葉將貢名利...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

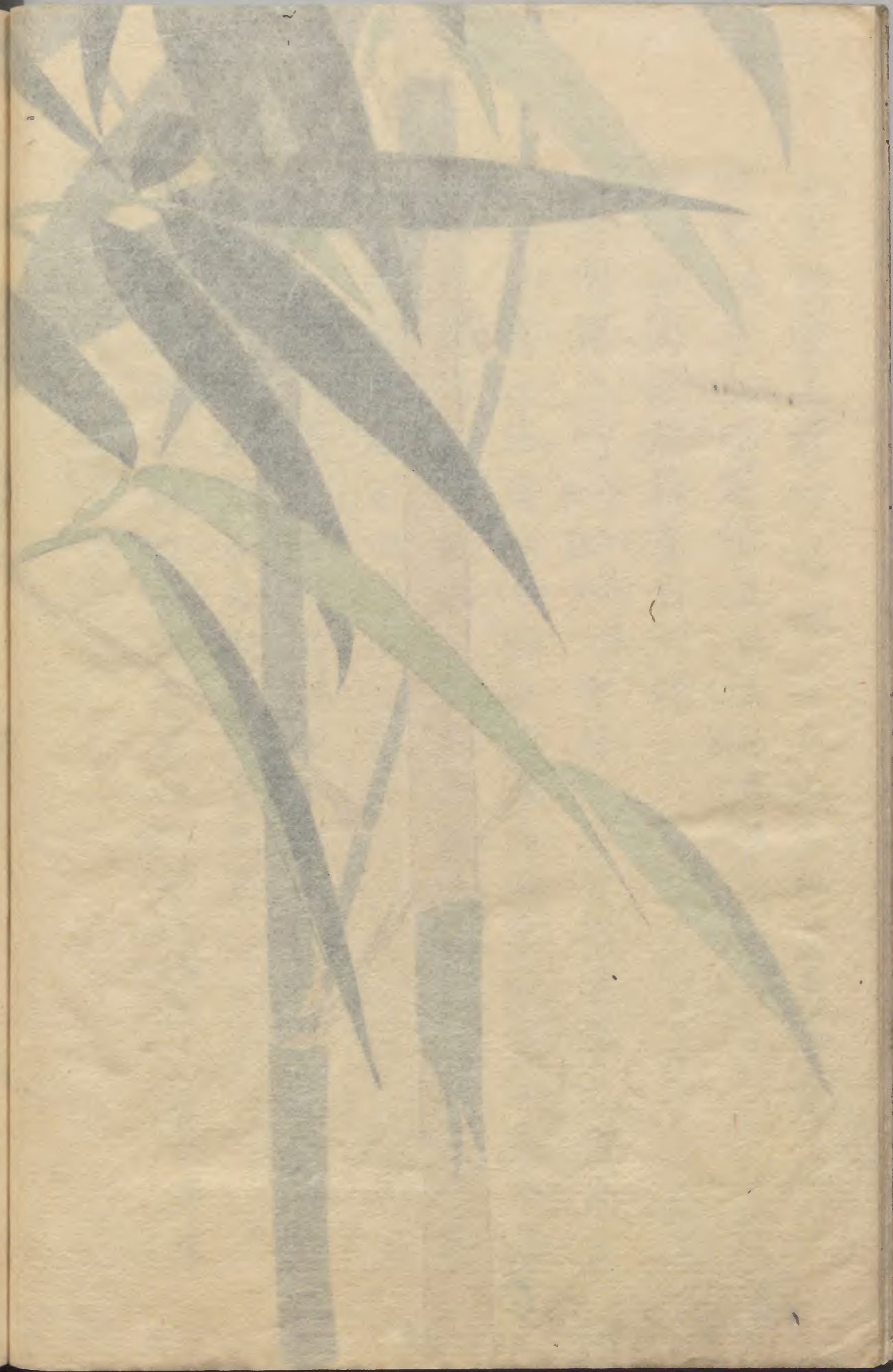
前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...

前竹葉... 亦皆... 矢皆出...





釋名

の和名類聚鈔○和訓栞ノ筥とのともの度あり今  
 葉ノ神代卷ノ云天照大神背負千箭之鞆知能此云  
 即此ノ下畧ノての増補地錦ヤハ江都方言○  
 即箭字ノ古訓ナリ也此即矢竹ノ義  
 也也  
 和漢三才圖會廢物類纂大和本草本草一家言○此即箭  
 竹ノ義あり  
 漢書呂氏春秋○葉ノ水ノ筥桂ノ草ノ落草ノ即世  
 名あり  
 筥路 尚書呂氏春秋○葉ノ水ノ筥桂ノ草ノ落草ノ即世  
 名あり  
 一ノ名ありてその物を見て此竹の大小をさるる  
 二種竹也といへり説文ノ筥路也落筥路也古文路从路  
 全一竹ノて其説孔傳ノ同ノ筥路也  
 山居賦○筥ノ此葉ノ箭幹竹  
 廣西通志○此幹箭ノ筥路也  
 作ス一故ノ名ナリ

○一種矢竹

一種ハ矢竹也今白河侯大塚以下邸ノ竹ノ高さ大抵  
 五六尺小ノ枝幹全ク矢竹ノ如ク葉ニモ矢竹ノ似ク



五葉或は四葉葉以て一朶より一葉の上葉とて二葉相對し  
て毎葉白色の間道ありとも一株のうちに一葉の間道な  
くしてその色矢竹と一朶を多も交るるは此種は往時清俗  
の携到せしと長崎より輸せしものなりといひ傳ふる  
他もその事なき

○通綵竹

通綵竹は枝幹並に矢竹に似て節の平らのお多事し亦  
矢竹のよきよきの葉皆仰出して上に向ひ下垂するを  
此竹の性也よの葉は状矢竹よりも極て細小にして  
長さ一尺許廣さ三四分を過ぎぬ毎莖の間に葉を以て一  
朶にしてその五葉なるをて上の二葉と對生し下は

















三葉互生ありしもの幹新年にのみ籜有りとしし年次  
経れ、皆落し事矢竹の如し此種もの根窠盤結し  
叢生數十百幹に至るもの今白河侯大塚の下邸にあり  
一種仰葉竹ありしもの竹前條と一樣しし毎茎上八九葉  
或は六七葉成つては殊異ありし此種今巢鴨の種樹家  
よりあり葉の書の孔傳に籜籜美竹也と見えしこと  
此竹矢竹種類のうちより殊に葉ありしものなり蓋し  
本文にいふ籜籜籜路にししこと常の矢竹に葉の廣  
さ一寸許ありしもの籜籜籜僅小三四分成過りて山居賦に  
いふ籜籜筭箭なりしこと叔古人の此竹を撰きて矢に作  
るものなりしもの幹の直上ありしもの葉は直立ちし





絶て餘竹と異ありは矢れ直達するもの形状をよ叶  
ひあるの故ありしに尚考ふべし

釋名

通絲竹 種樹家稱○此葉極めて細長なり以て遠く望む時  
細きもの如く至て細小なりもの葉の長三寸許廣  
さ五分許過るるを近く見て仰葉竹 同上○名義  
絲の如く故に此名と命せりあり

○鳳凰竹 土用竹

鳳凰竹一名土用竹一名孟宗竹漢名鳳尾竹一名觀  
音竹とよむもの幹矢竹に似て大さ箸の如くし箸より  
細きもの如く高さ大抵二三尺より一節間相去るる三寸餘  
より四寸許に至る其枝よりして獨枝よりして年毎経る  
ものも獨枝の本より別して一小筍を抽出て双枝とるもの

いへとも女竹に如く三五枝を生るもの絶てり且籜落るる  
もの此竹の性也葉の状は竹に似て本廣く末尖り長さ  
一寸四五分廣は三分許より葉本細褐毛ありしは竹に  
似て極めて短なり 凡每枝稍葉々排比するもの九葉より  
十二三葉に至るは一朶と云ふもの始めの葉は尤も長くを  
以上一葉の如く漸々より少るもの葉先の葉は長さ三分廣  
さ一分許に至るもの一株叢生のものありしは  
もの幹大なりもの形状よりして其内少く枝幹極め  
て纖細ししは絲の如く薄線の如くししは  
て細大齊ししは此種駿河に産するもの土人以此  
藩籬と此即致富全書にいふ由は鳳尾竹高五六尺







密其小者高不盈尺笋生四季生輒摘其梢枝幹叢生葉々排比可為几案之玩然不若水竹之勁秀也

致富全書云鳳尾竹高五六尺竿細葉多形如鳳尾庭砌群芳譜云鳳尾竹高二三尺纖小猗小那植盆中可作書室清翫

秘傳花鏡云鳳尾竹紫幹高不過二三尺葉細小而猗那類鳳尾盆種可作清玩

肇慶府志云鳳尾竹出封川笋大肥美為諸笋冠漳浦縣志云鳳尾竹梢葉森秀如鳳尾舊志名觀音竹

金壇縣志云鳳尾竹以其細小似鳳尾故名安慶府志云鳳尾竹小而細形如鳳尾可供盆玩

漳州府志云鳳尾竹通志云梢葉森秀狀如鳳尾江陰縣志云鳳尾竹蕭疎如鳳尾有僅尺許者有高丈餘者

會稽縣志云鳳尾竹葉眇小亦慈竹別種泉州府志云鳳尾竹俗呼觀音竹七邑俱有

類纂引所引以再ひ右農政全書以下諸書之廢物

釋名

鳳凰竹和漢三才圖會○此葉繁茂土用竹本草一家言○此竹

多一故土用中殊小孟宗竹和漢三才圖會○寺島良安曰鳳尾竹詳錄農政全書致富全書○名義上文觀音竹泉州府志漳浦縣志○葉紫竹

異物れ同名















○村松竹

村松竹は越後國村松に産する竹にして其幹矢竹と一松竹  
と云ふも毎節矢竹より密にして其間僅く三寸より三寸五分  
過ぎるもの性柔靱にして折難きより領主堀族の藩にして皆  
此竹以て打毬杖に作り扱皇朝にて矢を作らば其筥の長  
五人より六人もの腫中より中指の  
先に至る節以て度より節は四節ありて撰ひてその内の一  
節は必ず羽のうらより節は佳し此村松竹は節は  
末より其節密なるは其枝は生るるの凹處至て深き  
八天より作る難きものなり予は村松竹の葉は親見  
せしむる蓋し其竹は一種密節なるものなり其葉極

めて大なる節にして其節の枝は生るるの凹處  
圓にして極めて深き九凹處ありて深き竹と此竹の  
るるの葉は其葉は大ききものなり竹譜小篇  
亦箇徒抗節而短又云是箭竹類一尺數節葉大如履  
以是即此竹の事なり

釋名

村松竹 越後方言○村松  
地名

○臺明竹 青葉笛竹

臺明竹一名大妙竹一名大名竹と古名を青葉笛竹一名  
二葉笛竹或は二字の畧するも笛竹といひ漢名は  
四季竹一名四時竹といふ此竹古より大隅國贈嶽郡清水郷



臺明寺山中小産此境内。天延年中鑄る古鏡あり其  
銘。此山中竹後天智天皇御宇剪為笛竹給其音清妙  
名謂青葉笛竹以來為笛竹真御所國史昆夷  
草本攷いそりの竹  
は竿類若竹大者圍可五六寸節間遠者遠二尺其葉青  
翠異常其筍貫四時而生其筠中含液宛如凝脂味更美  
也本草綱  
目纂疏今江都に移し植るものことの高  
さ一丈五六尺圍三寸餘の根上より二三節しその節密  
ししその間相去る事三四寸なり以上を節疎あり  
と八九寸あり或一尺五六寸に至るも地上の第一二節は  
し周圍し細小根連り出て頗る方竹の如きなり此竹始り  
乃枝て三枚或五枚なりし中幹より以上をて七八

枝は叢生しし籜付て年経ては葉を全く長節  
竹に似て細し大抵八九葉と一朶なり此筍大隅國亦産  
るもの四時を期して生るなり江都に移し植  
るもの夏月の最盛なり風土の寒暖によりて  
乃枝なりし  
和漢三才圖會云大妙竹状似長節竹而大周三寸許葉  
亦大也可以作笛  
又云薩摩國土産大名竹筍四時有之  
大和本草云大名竹倭名ナリ節間長し赤黄の條あり竹  
柔ニ不堪為器  
本草綱目纂疏云四季竹大隅臺明寺古鐘銘勒青葉笛



竹者是也

大隅國臺明寺在平治文狀謂之二葉笛或曰

笛竹

薩人曰臺明竹

俗誤作大明竹

群芳譜云四季竹節長而圓

中籥管生山石者音清亮大隅臺明寺山中自往昔有竹

林今尚琅玕萬株成一叢之林其竿類苦竹大者圍可五

六寸節間遠者逮二尺以作管籥其音妙爽遠聞故述古

謂之笛竹其葉狹長青翠異常其筍貫四時而生四季之

稱即出於此其筠中含液死如凝脂味更美獨在諸筍之

上夏月最為盛藩人以充珍饌紫臺明寺實我藩之古利

也檢古鐘銘

此銘大延中所換其古鐘今尚存

後天智御宇迄今為笛竹

貢御所又檢平治建長年間之解狀文狀等其事相同

今尚存而在其院而亦建長年以後充調御之用者數回皆載在藩

之舊史因考國史無所經見焉蓋述古之流例因不登錄

青史歟亦不可知矣紫長府錄本平家談載青葉箏篥及

播磨須磨寺青葉笛竹皆別種也

麿藩名勝考與書云臺明寺是古刹小山中幽邃奇

古更甚一園中の一種の竹の也よ青葉

笛竹是の天智の御世の也よ青葉

寺中鐘河其銘云隅川臺明寺是青葉笛之貢御所

白馬龍蹄之清躅也巖石廻外澗水橫中遠述仰於靈細

口索敍滯依爰古鐘銘云天延九年之比鐘改音日之小

鐘云云此銘嘉正元年丁巳冬十一月十九日大檀那當

國守護代左尉藤原朝長稟頼勸進者當山住僧阿周梨



亮午大工高麗行則同助行と記せし又其寺中の什物  
↓解状文状敷通り今其文一二紙抄出り上畧件貢柳笛  
竹任先例可切調進之由所令下知也云云平治元年七  
月十七日目大中臣判權大掾捨前判外畧又臺明寺青葉  
笛竹為住僧等恣切用奉穢事云云永曆二年八月廿九  
日國代勾當源判目大中臣判外畧又應保三年二月十日  
臺明寺大衆等解状の内上右謹檢舊記當山者元像孤  
獨靈窟朝廷鎮護道躅也天智天皇御宇之時被定笛  
竹貢御所遙四百餘歲根本大伽藍也云云又建長二年  
臺明寺勸進膝の内夫以臺明寺者天下無雙之靈窟人  
間第一之梵宮也云云故老相傳天智天皇御宇青葉二

葉笛竹貢御所自被定最以後五百八十九歳云云可遂  
往生淨土之望敬白建長二年八月九日勸進衆徒等敬  
白深壽大師判外畧所謂笛竹今猶四時青翠ふくく千  
株よゝろ吾藩の土人よゝろ故郷よゝろの罕りし  
世の人を是証するの鮮あり鳴呼の隠頭ふかしのい  
と嘆き

封内名勝考云大隅國贈歌郡山路村青葉山日吉山王  
地主權現と稱すの地主園と臺明寺の門あり西二十間許小奉  
森山あり大樟の下に石室あり立てりの故址あり傳ふ  
祀大穴持命例祭十一月未申日此一山証青葉山と稱  
ふ地名便覽よゝろ大隅州名所の一あり青葉竹即此  
山に名産俗臺明竹といふ社壇あり益救の杉村あり昔時名



匠一の銳<sup>ツクリタテ</sup>以て造立たせり

又云天智天皇太子よて筑紫へ御下向の時此地へ過臨<sup>オホシヨカリ</sup>

河<sup>カハ</sup>青葉竹<sup>アヲハタケ</sup>以て笛材の貢御所<sup>ノコト</sup>定めし<sup>ル</sup>り<sup>ハ</sup>笛竹

の事<sup>コト</sup>つ<sup>レ</sup>成<sup>ル</sup>或<sup>ハ</sup>天使<sup>テノリ</sup>遣<sup>ハ</sup>り<sup>シ</sup>或<sup>ハ</sup>綸旨<sup>ルンシ</sup>給<sup>ハ</sup>て<sup>シ</sup>在<sup>リ</sup>廳<sup>ニ</sup>人<sup>ト</sup>及

臺明寺主僧へ下知<sup>シ</sup>竹材<sup>ノ</sup>愛護<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>方</sup>論<sup>ス</sup>ん<sup>ハ</sup>又

同<sup>ク</sup>武家執權<sup>ヲ</sup>奉書<sup>シ</sup>等<sup>ノ</sup>若<sup>シ</sup>于<sup>テ</sup>通<sup>シ</sup>臺明寺<sup>ノ</sup>筭藏<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>俗

書<sup>ト</sup>明<sup>テ</sup>臺明寺<sup>ノ</sup>竹林<sup>ノ</sup>衆集<sup>ル</sup>院<sup>ト</sup>号<sup>シ</sup>自<sup>ラ</sup>天智帝<sup>ノ</sup>勅願<sup>ノ</sup>

所<sup>ト</sup>稱<sup>ス</sup>然<sup>ル</sup>當<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>勅願<sup>ノ</sup>の<sup>定額</sup>寺<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>と<sup>聞</sup>て<sup>是</sup>皇太

子の時<sup>ニ</sup>此地<sup>ニ</sup>御過<sup>ス</sup>有<sup>リ</sup>の<sup>後</sup>登<sup>極</sup>河<sup>ノ</sup>と<sup>青</sup>葉<sup>竹</sup>以<sup>テ</sup>

貢<sup>メ</sup>御<sup>ス</sup>小<sup>命</sup>せ<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>河<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>と<sup>筑</sup>埃<sup>隨</sup>筆<sup>ニ</sup>に<sup>む</sup>

り<sup>し</sup>天智帝<sup>ノ</sup>筑紫<sup>ニ</sup>小<sup>六</sup>年<sup>ニ</sup>迄<sup>止</sup>せ<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>の<sup>間</sup>九州<sup>ノ</sup>の<sup>地</sup>

河廻見遊<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>大隅國<sup>ノ</sup>い<sup>は</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>

此時大隅國てふ名て日向國內也此

追<sup>テ</sup>笛<sup>ノ</sup>つ<sup>く</sup>多<sup>ク</sup>竹<sup>也</sup>有<sup>リ</sup>多<sup>ク</sup>と<sup>御</sup>尋<sup>ハ</sup>は<sup>り</sup>し<sup>し</sup>當<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>の<sup>民</sup>の

山<sup>ノ</sup>竹<sup>ノ</sup>比<sup>シ</sup>と<sup>一</sup>本<sup>以</sup>青<sup>葉</sup>竹<sup>ト</sup>奉<sup>メ</sup>り<sup>し</sup>と<sup>帝</sup>

笛<sup>ヲ</sup>ば<sup>ら</sup>せ<sup>り</sup>と<sup>調</sup>律<sup>ノ</sup>の<sup>音</sup>聲<sup>ヲ</sup>を<sup>た</sup>ら<sup>せ</sup>り<sup>し</sup>

と<sup>都</sup>還<sup>御</sup>の<sup>後</sup>に<sup>青</sup>葉<sup>竹</sup>の<sup>伐</sup>て<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>し<sup>し</sup>笛<sup>竹</sup>以<sup>テ</sup>貢<sup>メ</sup>は

り<sup>し</sup>と<sup>大</sup>内<sup>ノ</sup>に<sup>貢</sup>め<sup>り</sup>し<sup>し</sup>と<sup>數</sup>々<sup>ノ</sup>笛<sup>ヲ</sup>造<sup>出</sup>せ<sup>り</sup>し<sup>し</sup>

と<sup>世</sup>に<sup>傳</sup>え<sup>り</sup>し<sup>し</sup>と<sup>多</sup>く<sup>と</sup>壽<sup>永</sup>に<sup>平</sup>家<sup>敦</sup>盛<sup>ノ</sup>を<sup>是</sup>以<sup>テ</sup>

秘<sup>藏</sup>せ<sup>り</sup>し<sup>し</sup>と<sup>俗</sup>に<sup>敦</sup>盛<sup>ノ</sup>の<sup>笛</sup>と<sup>節</sup>と<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>作<sup>り</sup>た<sup>る</sup>の<sup>也</sup>

蟬<sup>ノ</sup>と<sup>青</sup>葉<sup>竹</sup>生<sup>ル</sup>と<sup>を</sup>ま<sup>り</sup>し<sup>し</sup>と<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>り<sup>し</sup>其<sup>ノ</sup>本<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>

ら<sup>ぬ</sup>と<sup>言</sup>ふ<sup>と</sup>記<sup>ス</sup>る<sup>に</sup>此<sup>ノ</sup>事<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>り</sup>傳<sup>ヘ</sup>有<sup>リ</sup>記<sup>ス</sup>

た<sup>る</sup>も<sup>知</sup>ら<sup>れ</sup>り<sup>し</sup>と<sup>の</sup>實<sup>ハ</sup>得<sup>ら</sup>れ<sup>り</sup>し<sup>し</sup>と<sup>也</sup>又<sup>青</sup>



葉竹也今臺明竹より他國よりたきよのあはれて蒲葵  
 らしく同く朝廷御用より召れりとのあり  
 竹譜詳録云四季竹出浙東慶元山中浙西亦或有之高  
 不過八九尺節如若竹筍如筍箭枝生節間叢密小籜亦  
 隨生節間不脫落葉長細而柔媚甚宜圖書又名四時竹  
 以四時生筍故名冬春筍大夏秋筍小  
 群芳譜云四季竹節長而圓中管籜生山石者音清亮農  
 政  
 全書  
 同  
 秘傳花鏡云四季竹四季生筍幹節長而圓取為樂器聲  
 中管籜若生山谷者音更清亮可人  
 台州府志云四季竹四季生筍不絕

釋名

臺明竹 本草綱目纂疏封内各勝考○臺明寺に産す  
 故に名は薩摩の方言也  
 大妙竹

和漢三才圖會 大名竹 同上大和本草○葉に臺明竹は大明竹或は大名竹  
 甘竹に似るれども大名の姿は竹なりと  
 假借なり 懷竹抄一本は黄竹と

解文 二葉笛竹 建長 笛竹 平治 青葉竹 笈埃 四季竹 竹譜詳  
 譜 四時竹 竹譜詳録○此筍四時に  
 生に故に此二名なり

正誤

體源抄云青葉ノ笛ハ甘竹笛也昔シ蟬ニ碧鮮ノ二葉アリ  
 リ白露常ニ其上ニ凝ル故ニ青葉ト号ス尤靈物トスルニ足レ

葉に青葉笛と青葉笛竹として作れり  
 平治建長の文書解状にて云々  
 然るに臺明寺古鐘銘及  
 伯雅の三位の吹て得ら

り朱雀門の樓上の鬼に笛あり  
 東齋隨筆に青葉笛とす  
 鬼九とし



れは 笛なり 此ふえと葉ニツリ何れも其色一ツと赤一ツと青一  
是朝正の霞置の事なり 海ノ事ハ奇なる事ニシテ 誤りたりと云へり

俗傳ノ壽永此北平敦盛の持ノ笛ハ即青葉の笛と今現

攝津國須磨寺の什物と云ふ事 春湊浪語云青葉笛

一此の葉ニといひて事江談抄に云ふ後宇治殿平等院御造り  
て賢藏の納められし後冷泉院の御事なりと云ふ事 江談に見

えし 有識抄に青葉と撰津須磨の事なり 言傳へ侍る傳記に  
と見侍らるる事なり 須磨等と云ふ事 虚實ハさきも

うる 此青葉實なる物なり 天下第一の名管と云ふ富家殿の  
仰し本朝の横笛と葉ニ以て第一と云ふ第二青竹第三桐亭第四水龍

第五小水龍なり 體源抄に見えしものなり 又云青葉  
見し 名阿蘇物と云ふ事 平家物語に盛衰記に敦盛の最後ハ腰に

敦盛の物といふ不審平家物語に盛衰記に敦盛の最後ハ腰に  
笛と小枝と云ふ事 又高倉の文の御最後ハ腰に御腰に

いふも小枝なり 苗治承四年ハ光明山の鳥井の前にて菅御の  
後ハ敦盛の手より 思ふ事 是も同名なり 別物

此小枝ハ平忠盛笛の上より 鳥羽院より下賜し 經盛相  
傳り 敦盛の事なり 平家物語に盛衰記に

盛砂金百兩宋朝へり 求らるる 笛と見えし 誠  
あり 宮の事なり 御笛と有識抄に引記せし 承平三年四月

に







Handwritten Japanese text in vertical columns, arranged in a grid-like pattern. The text is written in a cursive style (sōsho) and is organized into horizontal bands across the page. The text appears to be a list or a record of items, possibly related to the drawing on the left page. The characters are somewhat faded and difficult to read in detail, but they follow a consistent vertical structure.





清俗の竹も青霞竹の竹は  
竹の節も長崎の竹の節は  
似て大に節の節の節の節  
竹の節の節の節の節の節  
竹の節の節の節の節の節  
竹の節の節の節の節の節  
竹の節の節の節の節の節  
竹の節の節の節の節の節





ホトの竹今草鴨の  
但書家培養し

笛の目錄の中に見えざる小枝ありて今傳りては  
れらるる長門本にも紫檀の家に入るる漢竹の箒箒と見えて其餘  
此異本よと書内葉と  
つら事を見えし

○一種大名竹  
一種大名竹一名大明竹も清俗のれを龍頭竹といふ此種

と往時商船の載來りて肥前國長崎の宮園に植ら

せりその葉ハ孟宗竹に似て大き熊笹の如し幹のふし

徑寸六分許毎枝疎りて節高う其根數株地上より

らりて出て龍頭の如しと佐藤成裕説いひ傳へ大名竹は大は

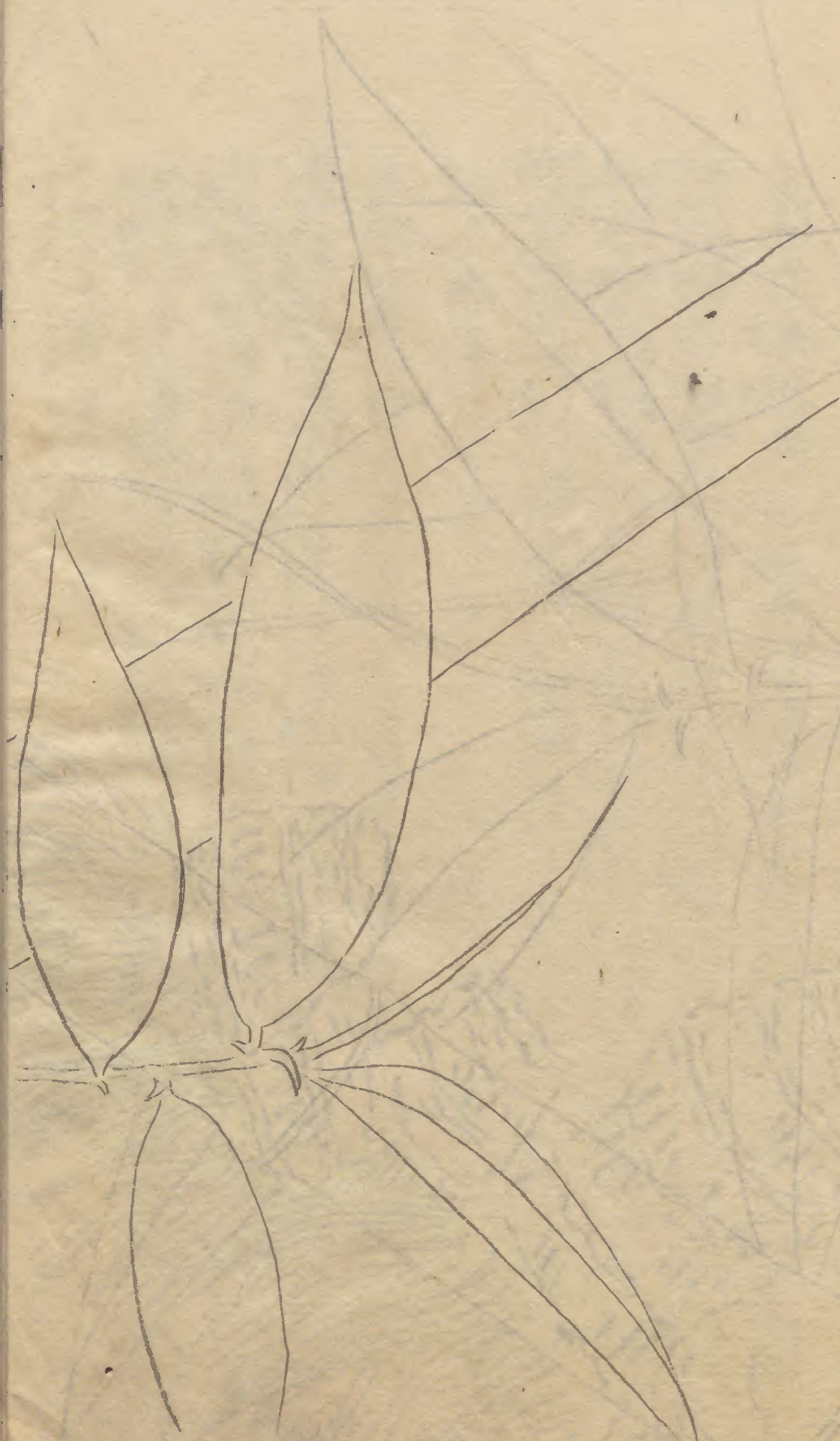
てその葉をりて見ゆ八九月のた後箒を生くす

大方りと長崎開見録いへるりての他も此竹なる事ときき  
長崎開見録云長崎の人大名竹といふて是一種の物なり



此竹大小一其葉和らふ九月の比筍を生は是す  
 ふいふつし長大なり其うし和らふ味も後し但皮剥去  
 且切て一面日そ水もひる置のち煮て食ふはちる  
 うらんと苦味あり此竹薩摩より多きとわらん唐人の食  
 料も持記をみるなり大き也長崎にて御薬園  
 あり人おろそ稀に植置をみるなり

佐藤成裕曰長崎官園有竹土俗呼之為大明竹余在是  
 郷一日偶華客問是竹答曰今謂之龍頭竹云余未考此  
 名之所出蓋清俗土名而不見諸籍乎  
案本草彙言  
 龍頭竹生若龍頭  
 出成都府彭縣大階山  
 陳氏竹譜  
 龍頭竹產山左  
 登來山中華山巴蜀亦有之根狀如龍頭  
 腹實止通一線  
 堅勁可作杖  
 物考



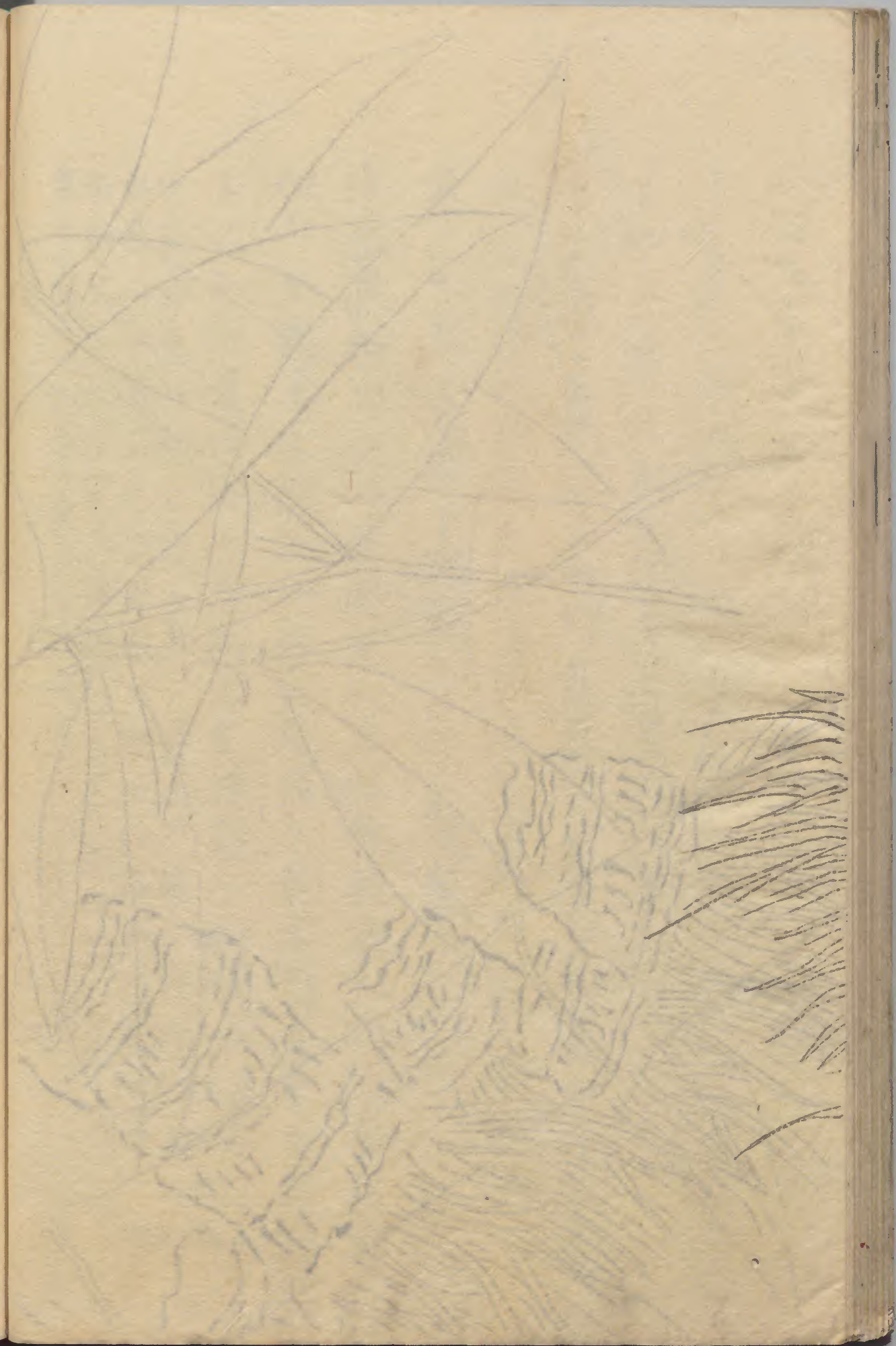


竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹



竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹  
竹名竹長竹間大明竹





釋名

大名竹長崎聞大明竹佐藤成裕説○葉此大名竹も長崎の方言

名地名其所持来竹竹故ある名付大明櫻  
大名北京の地名ちね強い難い俗大明  
大明葉常の長大俗大明  
此竹の大名大明の字假借  
即大明来大明の字假借

正誤

長崎聞見録云大名竹薩摩多

竹蓋蓋明竹蓋又葉和漢三寸圍會大妙竹似長節  
竹而大周三寸詩葉亦大也可作笛大妙竹即大名竹同故  
小國産部大名竹筍四時有之長崎移植今  
舶来の薩摩産本邦自生の實同種今  
種樹家大名竹の葉長節竹細小三寸圍會  
と相反大名竹の蓋別種







生るるも何れも常竹より比し多し其の黄芽上より四處をき  
 切異なる根上より第八九節より双枝を生く其れ  
 より以上も皆五六枝を生く其れ何れも第十五節より始りて  
 獨枝を生く其れより以上も三枝五枝或て七八枝を生く其れ  
 何れ又根本より絶て黄芽をくくして第四節より四枝を生  
 く其れより一節より三枝より其れより以上も六枝を生  
 く其れより何れも始め双枝を生く其れより二節より三節より一  
 節より獨枝を生く其れより何れも二節より三節より何れ又  
 根本の二三節より地中分離して周圍より細小根を生く其れ  
 何れ頗る方竹の如き其れ何れも絶て其の細小根の地上より何れも  
 其れより何れも何れも其竹の新舊及び長短より其れ











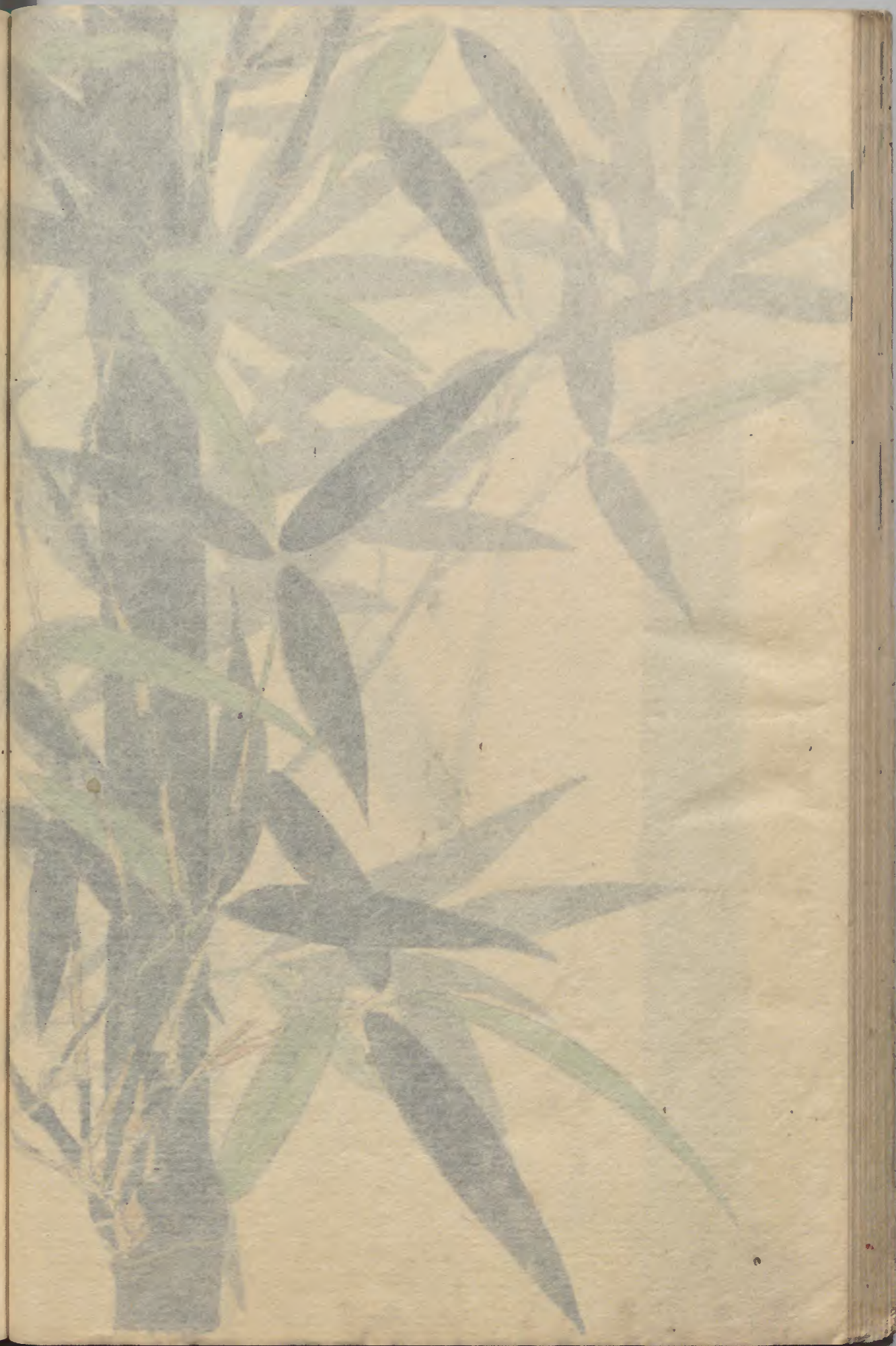




唐人の本草に大明竹の名ありてヤチノ竹と云ふ者  
今日本に大明竹と云ふ者ありてヤチノ竹と云ふ者あり  
大明竹はヤチノ竹の一種なりヤチノ竹はヤチノ竹の一種なり  
大明竹はヤチノ竹の一種なりヤチノ竹はヤチノ竹の一種なり

陽明竹





この異同は、この如く、必ず一幹竹以て、  
 此竹の種類の天幕なり

釋名

大名竹 庶物類纂 廣大和本草 和訓 録 山城国の方言なり  
 此大名竹は枝葉莖明竹に似たり  
 大明 庶物類纂 越中の方言なり  
 陽明竹 樹家 陽明の義詳あり  
 大明 庶物類纂 越中の方言なり  
 大明 庶物類纂 越中の方言なり  
 大明 庶物類纂 越中の方言なり

正誤

廣大和本草云大明竹和名タイマウチク俗ニ字大名ト書ス  
 一名ア廣東竹ト云續竹譜及ヒ大明一統志等ニミヘタリ

廣大和本草の杜撰妄説の多きは皆せの人ある所なり今再い  
 續竹譜は元の劉美之著をたし其書中絶



大明竹のちりあり大明一統志此名は事蹟聞ふにありしなり  
大明竹の名大明一統志に於て杜撰一統志大明の名の端は鎌倉の比  
諸候の稱大明一統志に於て其郡藩閩東多し今も京師の俗閩東  
大名大明一統志の詞大明一統志に於て杜撰の音の相似大明一統志に於て廣東  
竹大明一統志の一名大明一統志を思大明一統志ひ  
行大明一統志し大明一統志て大明一統志る

和訓栞云大明一統志る大明一統志い大明一統志ま大明一統志や大明一統志だけ大明一統志も大明一統志大明竹大明一統志と書大明一統志て大明一統志續竹譜大明一統志に見

業平竹大明一統志と大明一統志い大明一統志ふ大明一統志業平大明一統志谷川士清嘗て廣大和本草の妄説多し  
業平竹大明一統志は大明一統志以大明一統志て大明一統志大名竹大明一統志と同種大明一統志なり大明一統志と大明一統志い大明一統志ふ大明一統志る大明一統志誤大明一統志なり

○業平竹

業平竹一名和合竹一名たゞ竹大明一統志高さ一丈四五尺大明一統志一節  
圍一大明一統志寸六七分大明一統志の根上第一節大明一統志より每節左右互大明一統志に四  
處及大明一統志ひ小黄芽大明一統志あり大明一統志る四處は下節大明一統志より上節下大明一統志に至大明一統志る  
と大明一統志い大明一統志ふ大明一統志る常竹大明一統志より大明一統志し大明一統志るの幅至大明一統志て大明一統志せ大明一統志る大明一統志且浅大明一統志なり

此竹は大明一統志るの黄芽大明一統志あり大明一統志て七八節大明一統志を経大明一統志て始大明一統志て獨枝大明一統志を生大明一統志ず  
三四節大明一統志の間大明一統志より大明一統志三枝大明一統志なり大明一統志る三四節大明一統志より  
以上大明一統志四枝大明一統志或大明一統志は五枝大明一統志なり大明一統志る其三枝大明一統志なり大明一統志る中枝大明一統志の長さ二尺七  
八寸大明一統志なり大明一統志る左右の枝大明一統志は短大明一統志く大明一統志なり大明一統志る長さ二尺許大明一統志の四枝  
なり大明一統志る一枝大明一統志僅大明一統志に四五寸大明一統志なり大明一統志る三枝大明一統志のうちの短大明一統志き大明一統志なり大明一統志る  
短大明一統志く大明一統志葉大明一統志は女竹大明一統志に似大明一統志て大明一統志る長大大明一統志なり大明一統志る六七葉大明一統志は一葉  
より長さ六七寸大明一統志廣大明一統志さ七八分大明一統志或大明一統志は一寸許大明一統志の葉大明一統志の正中小ハ  
淡黄色大明一統志なり大明一統志る一縦細道大明一統志あり大明一統志る左右大明一統志より大明一統志七線路大明一統志あり  
る大明一統志る小相並大明一統志ひ大明一統志て葉本大明一統志より葉先大明一統志に至大明一統志る葉本大明一統志より大明一統志あり  
雄竹大明一統志の如大明一統志き長さ二三分許大明一統志の細褐毛大明一統志あり大明一統志る此竹大明一統志大名一種大明一統志なり  
大名竹大明一統志に似大明一統志て其節間相去大明一統志る事大明一統志は八九寸大明一統志なり大明一統志る



每枝却て大名竹（すげ）より長き故以て（すげ）大名竹（すげ）此  
 もの（すげ）の枝葉（すげ）も疎る（すげ）のれ新竹の形状（すげ）なりと  
 も年を経る（すげ）のむ舊枝の外別（すげ）小篠（すげ）と抽出て新枝（すげ）と分  
 る枝葉殊（すげ）繁（すげ）の梢抄（すげ）に至りては新舊（すげ）  
 も極めて柔弱（すげ）或ハ左或右（すげ）下垂（すげ）のしり  
 天稟あり此竹今本所中の郷南藏院境内ある業平天神の  
 社側及び亀井戸天神の社前其外本所中處々多（すげ）  
 是と蓋し竹譜詳録（すげ）載る所の龍尾竹の一種（すげ）なり  
 此（すげ）一種琉球竹（すげ）其枝葉大業平竹（すげ）と一様（すげ）  
 い（すげ）新竹の時ハ每節必ず三枝（すげ）生（すげ）の節間（すげ）細  
 褐毛（すげ）の梢抄（すげ）に至りて一種の大名竹（すげ）と同（すげ）直上







竹の葉は長し細し  
葉の裏は白く  
葉の縁は鋸歯状  
竹の節は平く  
竹の皮は滑り  
竹の根は地下に  
竹の花は穂状  
竹の果は小粒  
竹の葉は冬も  
竹の葉は夏も  
竹の葉は秋も  
竹の葉は春も





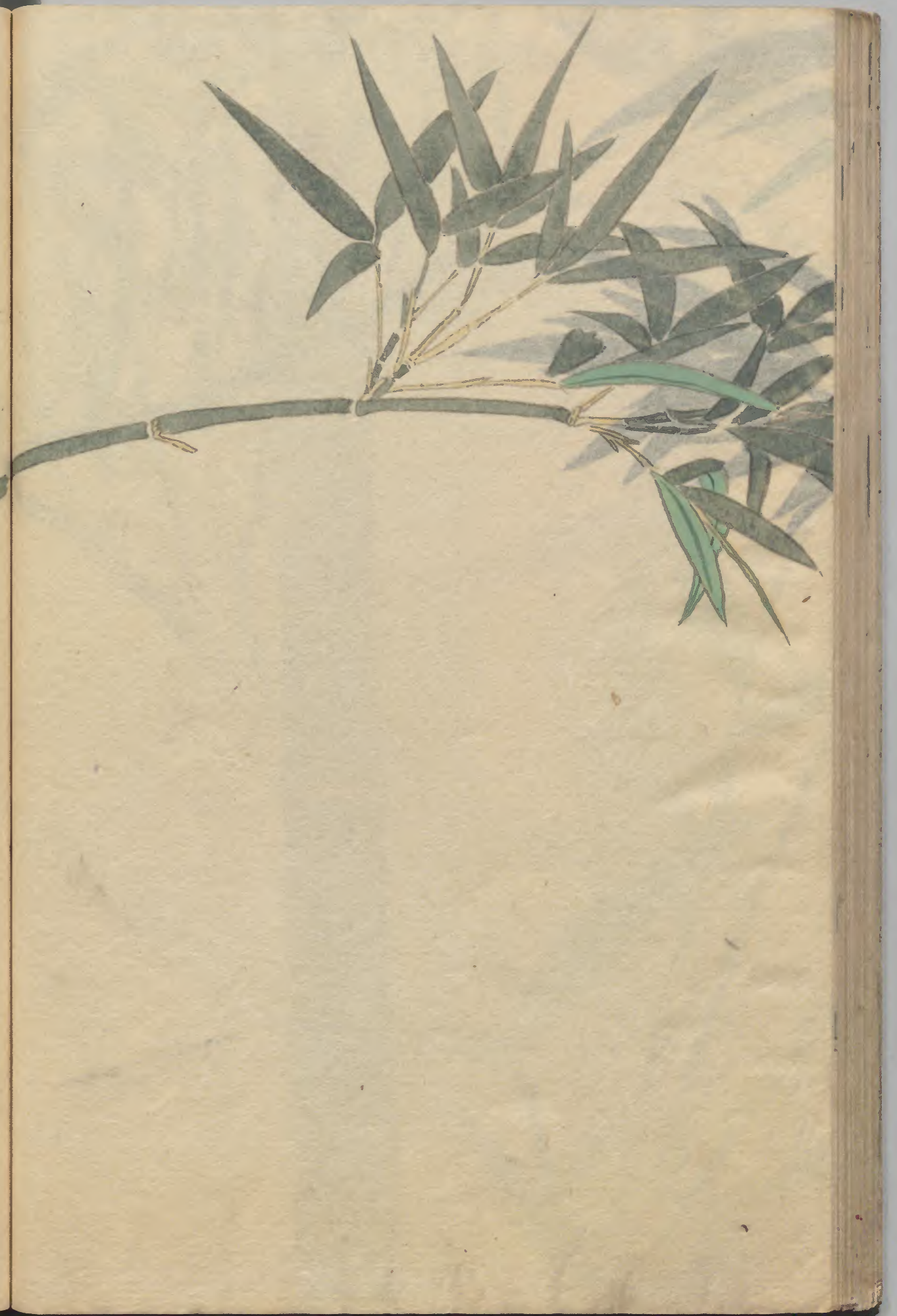












其竹之類  
天此竹之類  
大石  
其竹之類  
天此竹之類  
大石





下垂る竹と異あり又此筍二種の大  
 竹及び業平竹と一様なりといへども  
 毎籜上の小籜至て  
 狭長ありてハシ筍の天稟なり

和漢三才圖會云業平竹似長節竹而葉似苦竹葉者名  
 之中將業平之容貌人以為女而男也此竹擬之名乎  
 本草一家言云有蕩竹和名業平竹又名奈與竹

増補地錦抄云ハシ竹ハ竹の如くして節ハ女竹の如  
 女竹男竹の見分なき故ハあり平ハハシ  
 釋名

業平竹 和漢三才圖會本草一家言増補  
 地錦抄〇名義上文ヨリ和合竹 南藏院稱〇葉ハ  
此竹ヲ社内ニ植  
其側ハ亦礼  
儀建て和合竹の名ニある







極て大くして頗る箬葉の如くその葉本まで細褐毛の  
あるは苦竹の如く此筍諸竹と同じく四五月の頃生  
れ秋に至るとはる根節上再び小筍は抽出て年を経  
て枝も此竹嶺南に生るるもの秋根旁大筍は出  
綿々として絶然と竹譜詳録に本邦のものもあつた  
流風土は寒暖の異なりはるる江西の人  
ハ此竹の下節間に生るる小筍は壁とて  
上りて本邦にも駿州薩州等の温暖の國々  
に生るる時必に生育して扱此竹は大小の別の  
儀禮注に蕩笙簫之屬として細なるもの扱ひ尚  
書に箬蕩として扱ひの書摘袖注に小筍は橋といひ

大なるは袖といふ例も此蕩ハ即長大なるもの扱ひ  
説文に蕩可為幹箬可為矢といふも此幹といふも即弓  
幹の事なりすなはち箬管の屬より長大なるもの扱ひ  
爾雅疏に季巡と引て竹節相去一丈曰蕩といふも  
一物として別種として扱ひ既丹洲圖竹に載り蕩竹ハ  
徑一寸許のものと此竹温暖の肥地に産するもの極めて  
長大関節のものなりと明うけ

丹洲圖竹云蕩竹琉名麻手古竹藍水翁云苦竹大葉者  
其葉似箬而色淺緑

尚書貢禹云箬蕩既敷孔注云蕩大竹  
儀禮大射禮云蕩在建鼓之間鄭注云謂笙  
箬又屬



爾雅草類云、蕩竹、郭注云、竹別名、

說文云、蕩大竹也、从竹、湯聲、其書云、瑤琨筱蕩、可為幹、

筱可為矢、

爾雅疏引李巡云、竹節相去一丈曰蕩、又引孫炎云、竹闊

節者曰蕩、

桂海虞衡志云、蕩竹葉大且密、畧如蘆葦、

陽春縣志云、蕩竹莖直節疎、有類水竹、其筍亦佳、

竹譜詳錄云、蕩竹嶺南江廣之間俱有之、叢生極高、葉大

且密、一葉有生至十八九葉者、節上每出小筍三、籜破成

枝、中間一枝、彷彿與本身等、傍二枝亦龐大、皆橫出、尤易

植、至秋根旁出大筍、綿綿不絕、隔年成竹、或云、孽下節間

筍、植之亦活、江西人呼為橫枝竹、筍色甚白、味甚佳、名玉

版筍、過母梢極細長、彎曲垂下、如柳絲、挫戔、

青木氏庭中所植蕩竹之圖



















東藪竹譜所載蕩竹之圖













舟内圖世下注和崎世之圖

其山嶽... 舟内圖世下注和崎世之圖

本津東宮... 舟内圖世下注和崎世之圖

景日金... 舟内圖世下注和崎世之圖

乘舟... 舟内圖世下注和崎世之圖

此舟... 舟内圖世下注和崎世之圖

觀... 舟内圖世下注和崎世之圖

一... 舟内圖世下注和崎世之圖

一... 舟内圖世下注和崎世之圖

俗説五... 西行法師

の... 西行法師

... 西行法師

... 西行法師

... 西行法師

... 西行法師

... 西行法師

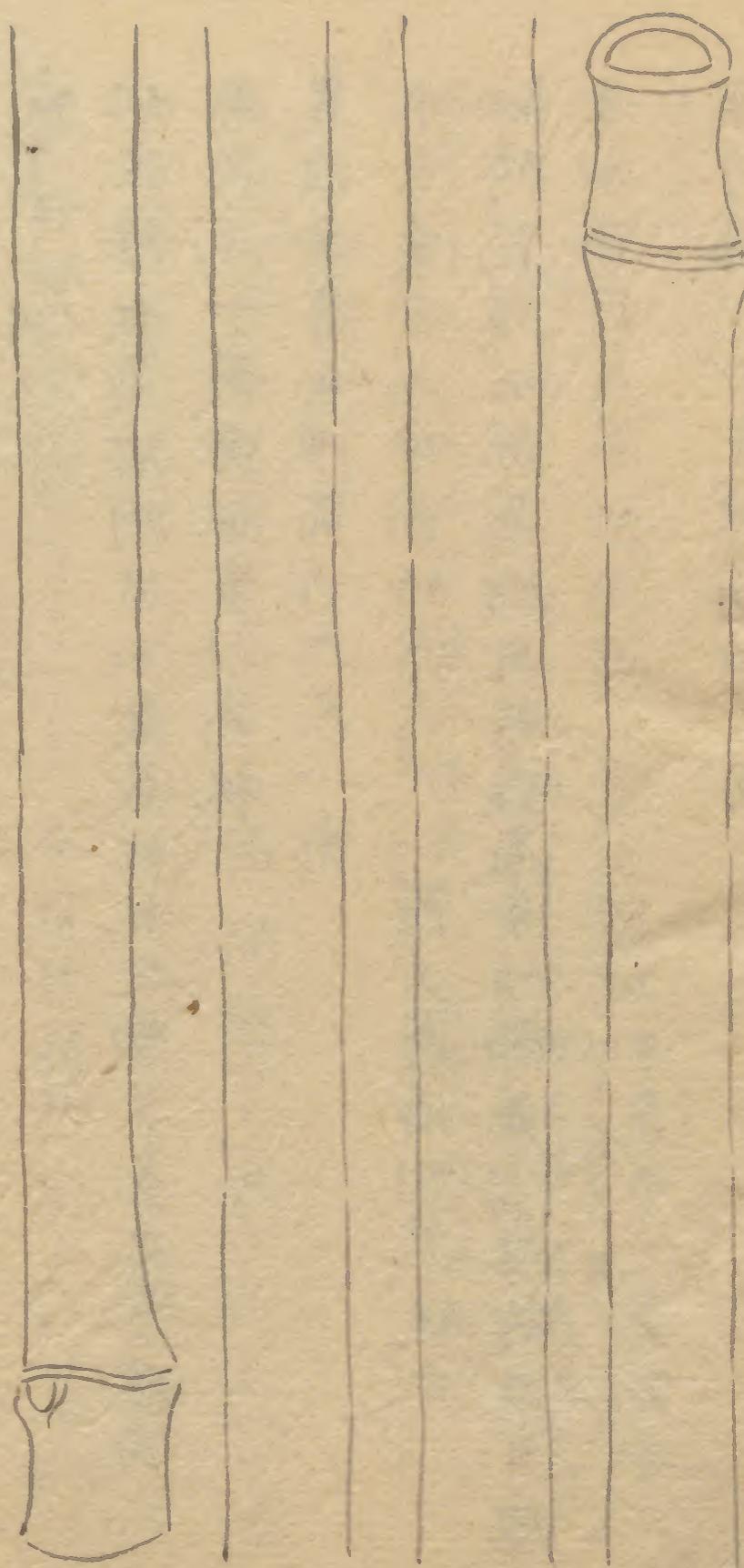
... 西行法師

... 西行法師

... 西行法師







正誤

俗説、今鴨立澤、疎節竹はよみり、西行法師

のつき、杖、秋の夕暮、置り、影、連歌師宗祇、柴庵、結ひ居り、

あもひ、其時の奇、住む、時鴨立、沃追の序、詠人、遺蹟、

思ひ、せん、今、碑、残り、六十餘州、一枝、枝三

千、世、男、兩、眼中、対句、此所、西行法師の杖、

傳、或、三千、風、の、つき、此杖、吉雄、幸、作、る、物、

○尺八竹、中、

尺八竹、漢名、通竹、一名、通節竹、一名、無節竹、

即、孝謙、天皇の、御代、中、將、姫乃、織、曼陀羅の、軸、

七、竹、蓋、一種、丸、疎節竹、一節、の間、大、抵、五

六、尺、或、二、丈、許、過、の、の、の、曼陀羅、幅、

北、戸、或、二、丈、許、秘、傳、花、鏡、

六、尺、録、或、二、丈、許、秘、傳、花、鏡、



丈五尺和漢三寸圖會の軸節の竹也

通竹北戸本邦より備後國に産す此竹西土より漆州本草に産す

和漢三才圖會云、中将姫者、横佩右大臣豊成之女也、云

云、禪尼来云、汝當調数万蓮絲織曼羅陀也、事叡聞勅忍

海連、令採近江大和河内三國蓮茎、献九十余駄、化女来

設、藁三把、油二升、浸油於藁、為燈、灰子丑三時、織成曼陀

羅、其幅一丈五尺、用無節竹為軸、實此三國無雙、虚寶也、

案、當麻曼那羅縁起圖説、此曼那羅乃化人用蓮茎取絲之所織也、幅方一丈五尺、以一夜生無節竹為軸子、丑寅三時、造熟、尋常の

通竹、

北戸録云、紫王最曰、漆州通竹、直上無節、空心也、

本草綱目云、無節竹出漆州、空心直上、即通竹也、

秘傳花鏡云、通節竹產於漆州、其幹直上無節、而中心空

洞無隔、亦異種也、

○ 狀名

尺八竹 本草綱目、案、無節の竹、尺八の名、疑、或、此竹、以、尺八の、竹、作、多、節、竹、と、呼、ぶ、此、名、

通竹、北戸録、本草綱目、本草、答蒙云、無節竹、節、の、隔、ち、空、心、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、

引、作、通、節、竹、花、鏡、無、節、竹、綱、目、



本草正誤

本草塔蒙、本草洞詮を引て云無節竹一名無心竹此葉、  
空心直上のあやみ、無心竹名疑、  
以本草綱目、  
此無心竹蓋、  
空心のちや、

○おん竹

おん竹、阿波國の名産、予此頃得、は幹の長、三  
尺許、周囲寸四、處數縦道、  
至る、の凹處、ふま、巨細の異、  
五節、  
の間、五寸六分、第三節、  
の、  
は、  
又





正註

本亭塔婆... 本亭洞... 引...

○ふふ竹

たものめし... 何及國の石... 藤敷... 四葉...

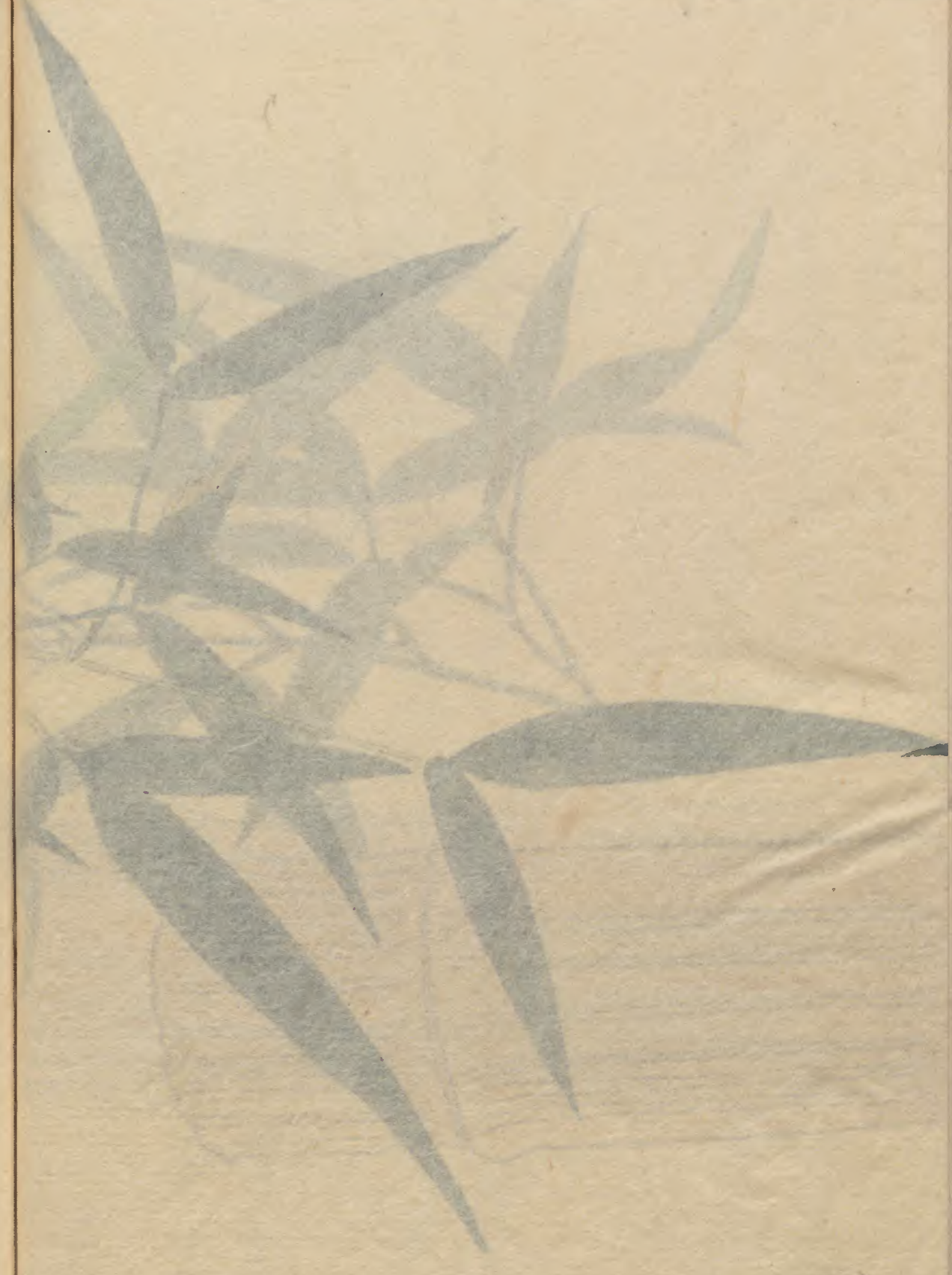
竹... 節... 上節... 竹の如し又...











竹肉を細查するに上下の肉は左右に肉より七少く  
 厚きを以てその径一寸九分五厘の径一寸七分六厘竹身  
 正圓なるもの此竹の性也一種山竹といふもの此竹  
 之前條に比ぶるとその凹處や浅く  
本草一家 此二種又實  
 は本邦の異竹として西土廣くしては  
 といふ聞かす  
 本草一家言云阿波國有異竹呼皺竹其幹皺面線路有縱  
 文幹大者径數寸好事者以作花瓶又一種線溝者呼山竹一  
 類一種也

○叙名

ある竹  
本草一家言の葉はある竹といふ一家言の皺竹は作て皺面線路ありといふもの俗語多くあり或は物の枯萎



山竹 同上○此二名とも竹の義ありしを知るべし

○以し竹

いほり竹一名むし竹と漢名細棘竹一名刺竹一名刺勒一名勒竹一名筈竹一名攤竹一名筈籬竹一名笏竹一名笏笏一名筈竹一名荅黎竹今此種絶て植ふよしありしと和漢三才圖會棘竹希しん東藪竹譜也し刺竹の圖と載るし其圖のしつゝ處いし詳しし竹の名も既し増補多識  
和漢三才圖會云棘竹希有之然小而未見大者  
竹譜云棘竹駢深一叢為林根如推輪節若束鍼亦曰筈

竹城固是任篋筍既食鬚髮則侵又云棘竹生交洲諸郡叢生有數十莖大者二尺圍肉至厚實中夷人破以為弓板節皆有刺彼人種以為城卒不可攻萬震異物志所種為藩落阻過層墉者也或卒崩根出大如十石物縱橫相承如繆車一名筈竹見三倉筍味落人鬚髮  
竹譜詳録云笏竹一名籬竹一名荅黎竹一名攤竹一名管竹出廣右西江安南尤多即棘竹也南方呼刺為笏叢生大者二尺圍肉至厚幾於實中彼人破以為弓材枝葉喜下垂自根至梢每枝節間對生二刺尖抄彎曲若鉤人家環植以為垣牆初植莖作一叢三五年後枝蔓自糾



纏人多鉤刺，雖雞犬豕豚不能徑。又竹譜云：棘竹駢深一叢為林。云云。南方異物志云：棘竹有刺，長七八丈，大如甕。西陽雜俎云：棘竹一名筰，節皆有刺，數十莖為叢。南夷種以為城，卒不可攻，或自崩根出，大如酒瓮，縱橫相承，狀纒車，筰食之，落人齒。按此棘竹即笏竹刺竹是也。廣志名櫛竹，嶺表錄異云：笏竹枝上有刺，南人呼為刺勒，自根橫生，枝展轉如織，野火焚燒，只燎細枝嫩葉，至春復生，轉復牢固。密邕州舊以刺竹為牆，蠻蠻來侵，竟不能入。又如新州舊無城，紹興間黃濟來為守，以笏竹環植之，號竹城。南越志云：欒竹細而多刺。南越志云：永昌縣有棘竹，長十尋，大如甕，其間短有軌六

七丈也。為竹叢，薄葉下有鉤刺，或有條末如芒刺。白孔六帖云：王式從安南都護浹壕繚柵，外植刺竹，寇不可冒。

典籍便覽云：勒竹中心堅塞，枝幹相交，枝上有刺，南人呼刺勒竹，又名澀勒，出嶺南。

桂海虞衡志云：笏竹刺竹也，芒棘森然。

本草綱目云：有林竹一名笏竹，芒棘森然，大者圍二尺，可禦盜賊。

本草彙言云：棘竹十數莖叢生，大者有二尺圍，肉至厚，中實生，交州諸郡夷人破以為弓，其筰食之，落鬚髮。閩書南產志云：勒竹枝上有刺，中心堅塞，枝幹相交。



通雅云、西廣今多刺竹、生卷曲、煩猥、竹譜名為筴竹、李  
石名為攤竹、可作籬笆也、  
貴州通志云、笏竹即筴竹、嶺南竹也、又名濇勒、蘇軾詩倦  
有濇勒暗蠻村、是也、肇慶府志、笏竹俗呼刺竹、竹譜云、筴  
竹有刺、可作藩落、本草綱目訛為笏竹、  
高要縣志云、勒竹三種、小者竿蕭疎、可玩、大者名鷄距勒、  
以作樊圃、杖幹盤固、刀斧不能施、雞犬不能穿、新州有勒  
竹城、是也、又一種挺幹、數丈、節間微刺、質厚堅利、兵仗所  
必須、竿不堪甜、諸志作笏竹、取其多力、  
諸羅縣志云、筴竹高四五丈、大者圍尺五六寸、旁枝橫生、  
而多筴、堅利、人不敢犯、密者可禦盜、草屋取為梁柱器物、

資之用甚廣、

養餘月令云、笏竹出西江、筴生叢密、節間多刺、民居植之、  
以當藩籬、宋新州守黃濟以州治無城、募民環山竹、雞犬  
不能穿入、必笏竹也、

日詢子鏡云、笏竹大如釣絲、自根至梢皆密、節々有刺、長  
寸許、山野間每數十家成一村、共植此竹環之、以為屏翰、  
則蛇鼠不能入、足可為備禦計、聞徭賊亦皆恃此、為金湯、  
官軍亦無可奈何、後見續竹譜云、南人呼刺為筴、音勒、筴  
州舊以為城、蠻蠻來侵、不能入、今鬱林州種此城外、呼為  
護城、桂海虞衡志則書以笏、不知孰是、  
陽春縣志云、小者名刺竹、大者名濇勒、長刺密節、可蔽村







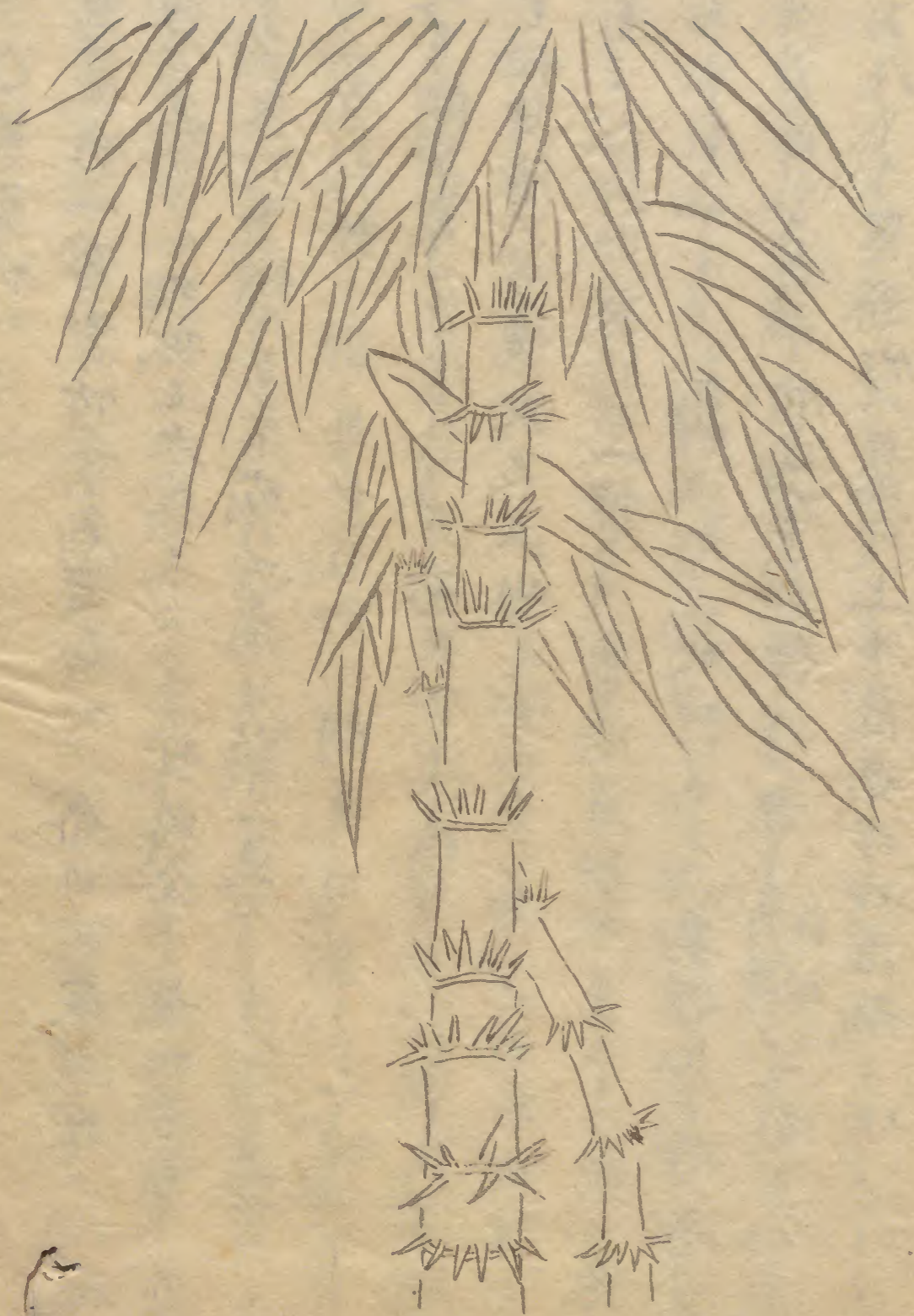
貴州通志云刺竹出府屬即笏竹又名澀勒竹譜云筴竹  
 有刺其方者可作杖案貴州刺竹有方竹之圓者以誤刺竹之凡  
 方竹之徑一寸或六七八分其竹皆方如竹之圓者以下徑  
 四五分者常竹之圓者如竹之圓者刺竹之圓者  
 澀勒竹與同刺竹之圓者如竹之圓者刺竹之圓者  
 澀勒竹與同刺竹之圓者如竹之圓者刺竹之圓者  
 志以刺竹之圓者如竹之圓者刺竹之圓者  
 古要論

典籍便覽云刺勒竹又名澀勒

物理小識云東坡永澀勒即筴籬竹有刺者案刺勒竹即棘竹之名

澀勒竹一名刺竹一名澀勒竹一名刺竹一名澀勒竹一名刺竹一名澀勒竹  
 二種之混

東藪竹譜所載刺竹之圖













南方草木狀云、篋箒竹皮薄而空多、大者徑不過二寸、皮  
慶澀、以鏘犀象、利勝于鐵、出秦。

廣州記云、篋箒竹皮薄而空多、大者徑不過二寸、皮上有  
澀慶、文可為錯子錯甲、利勝於鐵、若鈍以漿水澆之、還復  
快利。

竹譜詳錄云、篋箒竹出廣右安南、又名澀竹、節長二尺餘、  
每節上。

遵生八牋云、篋竹皮薄而空多、徑不餘二寸、皮上有粗、可  
為鏘子鏘甲、利勝於鐵、若鈍以漿水澆之、如蕉快利。

篋箒竹、作、  
餘、作、錯子錯甲、鏘子鏘甲、  
上有粗の四字、作、  
字以落、

揚升菴文集云、韻書四豪箒字下注云、篋箒竹名而不詳  
其說、案異物志、南方思罕國產竹、可礪、  
瓜、是也、崔鶉詩曰、時一出輕芒、  
莫曲口、思罕弩箭磨青石、  
箭、多東廣新州有、此種製成琴樣、  
則微滑、當以酸漿漬之、過信宿、  
坡詩、倦看澀、  
農政全書云、篋箒竹出、  
咸琴樣、為礪甲之、其用人微滑、  
初、亦可作箭。

農政全書云、篋箒竹出、  
咸琴樣、為礪甲之、其用人微滑、  
初、亦可作箭。



正字通云、篋相咨切、可思、篋旁竹一、枝百葉、有毒如草、大  
秦出篋旁、以鍤犀象、利于鐵、澀者以鍤甲、異物志、南方志、  
牢國產竹、可礪持甲、竹譜云、可坐瓜、今廣東新州有此種、  
製成琴樣、為厲甲之具、用久則微滑、當以酸漿漬之、過信  
宿澀復初、一名澀勒、

陽春縣志云、篋旁竹皮最堅利、可作刀、割澀可礪瓜、其  
葉有毒、能螫人、異物志出自南方、思牢國云、

高要縣志云、

蓋一篋旁竹、相似、  
非此竹、乃竹、

諸羅縣志云、珠籬竹、高丈許、如持夫、人居用以編籬、

東菽竹譜所載刺竹之圖

案、此云節  
高、









陽春縣志云、篋筩竹皮最堅利云、其葉有毒、能螫人、葉、篋筩竹、

故、唐志、任作筩、其毒、即篋竹及、  
筩竹一名百葉竹、然、陽春縣志、百葉竹、以て混、同物、  
篋筩竹、毒、思、字、篋筩字、假借、  
此竹、毒、且劉淵林の說、筩竹有毒、  
毒、

本草綱目云、百葉竹一枝百葉、其性或柔或勁、或濇々者、  
可以錯甲、謂之篋筩、滑者可以為席、謂之桃枝、勁者可以

為戈刀箭矢、謂之矛竹、箭竹、石麻、柔者為繩索、謂之

蔓竹、弓竹、按、百葉竹、筩竹の一名、  
篋筩竹、桃枝、竹、箭竹、蔓竹、等、  
兼竹、異、竹、譜、寄、譜、及、  
以上數種、

○沈竹

沈竹、漢名、漢名、蟲竹、蟲竹、の產地、肥前國佐賀、

本草一家言、  
の、翼、生、  
此種西土、  
毎節、  
新蟬

竹七、閩山中、及び婺州、福州等、本邦、

肥前國の、他、

本草一家言云、有葉竹、生、如油、  
出者、  
肥前、  
佐賀、  
産之、  
和名、  
沈竹、

竹譜詳録云、其、  
竹、  
生、  
七、  
閩、  
山、  
中、  
叢、  
生、  
如、  
盧、  
每、  
節、  
生、  
一、  
葉、  
如、  
新、  
蟬、  
之、  
未、  
翼、  
者、  
外、  
無、  
竅、  
隙、  
隨、  
竹、  
而、  
生、  
竹、  
將、  
老、  
乃、  
見、  
其、  
筩、  
而、  
出、  
今、  
婺、  
州、  
東、  
陽、  
山、  
中、  
亦、  
有、  
之、

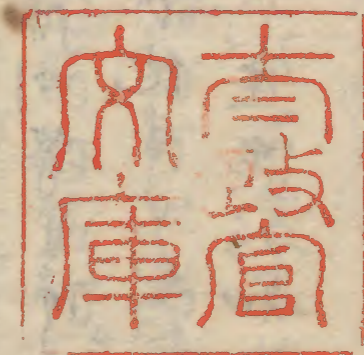
八閩通志三山志  
福州府志同



釋名

沈竹 本草一家言〇素曰沈竹ハ蓋一其竹の訛轉り也又一種  
沈竹ハ竹譜詳録云沈竹生是平山谷質重易沈削為小弩  
箭投水亦沈遇風不為敵側射者  
取焉とよ山同名異物なり 其竹 山志福州府志

桂園竹譜卷之二終



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



農商省  
圖書  
第八  
冊